

お茶から見るアジア
(4)

ミャンマーの食べるお茶

須賀 努

現在日本ではミャンマー黎明が起つてある。軍事政権が民政に移行し、アウン・サンスー・チー女史が国會議員になるなど、民主化が進むミャンマーは、国内や中国で手詰まり感のある日本政府と日本企業にとって、最後の楽園のように見えるらしい。確かに六千万人を超える人口、豊富な資源、対日感情の極めてよい国民性、訪れた日本人がミャンマーに対してよい感情を持つのは分かる気がする。

筆者がミャンマーを初めて訪れたのは、日本人ビジネスマンなど殆ど見掛けなかつた二〇〇四年。ある人から「ミャンマーではお茶を食べるんですよ」と言われて、興味を持ったことがきっかけだった。当時はミャンマーへ行くと「そんな危険な所へ行って大丈夫か」と必ず聞かれたものだが、行ってみるとそこは一九八〇年代の中国に酷似しており、外国人にとって軍政権はむしろ安全弁であった。なお、軍政

と共に共产党、全く異なる体制だが、実はその行動パターンは結構似ていると感じられる。

ミャンマー語ではチャと言わない

ミャンマー語で茶はラペイエ工と言うらしい。世界で茶を表す言葉はチャかティの二種類しかないと言わわれているが、ミャンマーはそのどちらにも属していない。ラペは手で摘むこと、イエは茶葉を指す。茶は中国を発祥の地として、北回りと南回りの二ルートでヨーロッパに伝わった。現在のロシア経由のルートではティ、またはテで表現され、東南アジア、南アジア経由のルートではチャと呼ばれている。

ミャンマーはその位置関係からして当然チャの系統に属しているはずだが、チャという言葉が見当たらない。恐らくは中国雲南省などと隣接した地域では昔から自生の茶樹が存在し、主に少数民族が扱っていたが、行ってみるとそこは一九八〇年代のことから、チャという言葉が伝播しなかつたのではないだろうか。伝説ではある木こ



漬物石で漬けられる茶葉

シャン州の茶畠はケシの代替作物
ミャンマー東北部、雲南省と国境を接す

りが山の中である葉を摘み、仮眠している間にその葉が水に落ち、起きて飲んで見ると美味しい飲み物であった、というものがあるらしい。

るシャン州に向かった。ヘーホーという旧日本軍が建てた軍用ターミナルも残る長閑な空港から車で二時間、仏教遺跡が残るビンダヤという街で車を降り、山道を二時間ほど登る。そこには山間の小さな茶畠が点在し、茶農家が居住していた。かまどに薪をくべて湯を沸かし、茶を淹れてくれた。実に質素で伝統的な生活が垣間見られた。

茶葉は緑茶だが、取り立てて質が良いとは言えない。だがその農家の住居が山の中にあってはかなり立派なのには少なからず違和感があった。何故なのか、ガイドも農家も答えてはくれなかった。

麓に降りてきて、紙工場を見学した。家内工業だが、実際に上質な和紙のような紙を梳いていた。一体こんな田舎で何のために和紙を作っているのか、地元民は「傘を作るために」としか答えない。後日ある本に「ヘロインを包むには和紙が適している」との記述を発見し、ようやく合点がいった。二十三年前までこの付近ではケシ栽培が行われていたが、国際社会の要請などで転作が進められ、その代替作物として茶が選ばれた。転作のための補助金もかなり出たらしい。

食べるお茶は漬物

また別の村を訪ると、そこでは食べるお茶、ラペーソーが作られていた。摘んだ茶葉を乾燥させ、その後日本の漬物のように作る。麻袋に詰めた茶葉を上から漬物石で

押さえる。一週間ぐらいで出来上がる。作っているのはダヌーなどの少数民族。因みに

シャン州では煎餅、赤飯、納豆、豆腐などを日本で現在食している多くの食べ物の原型と思われる物が食されている。日本人のルーツの一つはこの辺りだ、と言われば、そ

うだと思うほど。また人々の顔も日本人に近く、筆者は茶農家で「お前の祖先はビルマ人か」と真顔で聞かれた。

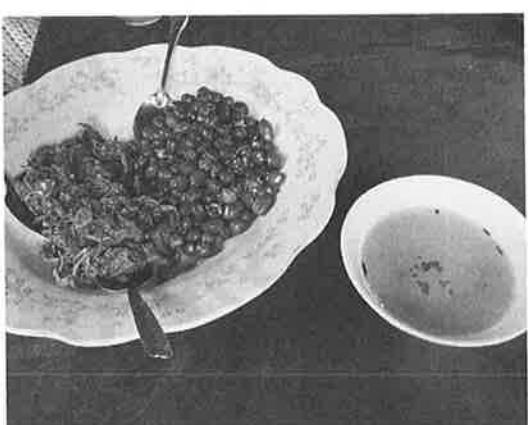
ラペーソーは日本のように漬物として食べるのでなく、自分の好みに合わせてゴマや干しエビ、塩などと混ぜて、茶を飲むときにお茶請けとして食べられ、ティサラダ、などと言われている。特に女性に好まれる

ようで、午後のお茶の間に数人でワイワイ話しながら食べている姿は何とも微笑ま

しい。
だが今回訪れたガローという街の郊外、山の中に入ると、以前は茶畠だった場所がオレンジ畑に替わっていた。更にはそのオレンジが害虫にやられたらしく、木々が銀色に染まっている所さえあった。大量の農薬、害虫駆除剤が使われている。

農地を捨てる農民

最近ではお茶を作るより、ラペーソーを作った方が収益的に良いようで、お茶は副次品化している。更にはイモを干したポテトチップの生産も盛んで、この辺りの農家は市況により生産商品を替えていっている。



食べるお茶ラペーソーとお茶

村人に聞くと、「農作物の値段は上がらないし、手間ばかり掛かる。農業などやつても儲からないので、出稼ぎに行く」と言う。その出稼ぎ先がミャンマー各地に点在する鉱山など。資源関連の価格が急騰したこと、中国がミャンマーの資源を手当たり次第に抑え、開発を進めていることと、この出稼ぎには当然関連がある。

数年前に行つた北シャン州には比較的大きな茶園も存在し、日本の茶飲料メーカーが進出するとの報道も見られたが、今回訪れた南シャンでは山間の小規模、伝統農業が破たんしかけている様子が伺えた。現在ミャンマーではヤンゴンなど一部の都市が急速な発展を遂げる一方、地方は発展から取り残されていく。今後の茶生産などへの影響が懸念されている。（コラムニスト）